

経済システムの比較理論

ヴェルナー・ゾンバルトと
ジョン・ヒックス¹⁾

酒井泰弘

Yasuhiro Sakai

滋賀大学 / 名誉教授

I ヒックス先生の「広さ」と「深さ」 —はじめに

本稿の主題は、経済システムの比較理論である。人間の歴史を顧みると、実に色々な経済システムが存在する。各システムの「デザイン」と「絵付け」は、時間の「縦糸」と地域の「横糸」の二つの組み合わせによって巧みに織り込まれている。一方に力強く流れるデザインもあれば、繰り返しや渦巻きが数多く出現するデザインもある。また、赤・青・黄色などの原色が支配的であるような絵柄もあるし、全体的に暈しや中間色が多く、ついには白黒だけの水墨画のような世界もあるのだ。

経済システムの比較研究は、間口が非常に幅広く、かつ奥行きが大変深い。近時は「リスク研究者」と専ら見做されている筆者が、「リスク挑戦」よろしく、今回かかる「異分野」と見られる分野に取ってチャレンジしようとするには、もちろんそれなりの理由がある。その理由の一つは、故森嶋通夫教授による、次のような印象深い文章である²⁾。

「ヒックスは大学の途中で数学科から経済学科に転科した。経済学は、理論でなく労働問題の研究から始めた。それゆえ彼の研究分野は非常に広い。私自身[森嶋教授]は彼の多くの著作の中で、『経済史の理論』と『貨幣の市場理論』が特に好きである。前者を読んだ時、「今後はウェーバーのような仕事をするのか」と彼に聞いたが、「そういう気はない」が答えだった。しかし他日「あの本で、ノーベル賞をもらっていたらもっと嬉しかったろう」と言っていたから、『価値と資本』よりもこれらの仕事を彼が評価していたことは確かである」

私は長い研究者生活において、理論経済学からスタートしたものの、経済政策や応用経済学の

1) 本稿の成るについては、平成20-23年度科学研究費補助金(研究代表者:久保英也・滋賀大学教授(基礎研究C、課題番号20530384)「保険と資本市場の融合と独立性」から、部分的に研究資金提供を得ている。感謝の意を表したい。

諸分野に触手を次第に広げてきた。所属する内外の学会数は多いときに50程度、今は随分と整理して漸く20以下になった。かつては理論・計量経済学会（現日本経済学会）の理事職を長らく勤め、やがては日本リスク研究学会、日本地域学会、生活経済学会の各副会長・会長職など、色々な学会の役員を兼任してきた。私は若いときから数学大好き人間であり、大学・大学院時代には理学部数学部の授業に通いつめていたこともある。もちろんヒックス先生と全く比肩すべくもないが、数学を含めた守備範囲の広さという点では何か共通点がありそうである。

この私が最近において近江商人の研究に着手し、さらには臆面もなく、思想史・学史にまで触手を伸ばそうとしている。上記の文章によれば、私が敬愛する森嶋教授はヒックス後期の著作『経済史の理論』（1970年）が特に好きであり、ヒックス自身もそれを初期の著作『価値と資本』（1939年）よりも高く評価していたという。ところが、歴史とは皮肉なものだ。時に1972年に、理論・厚生経済学における初期の業績にたいして、ヒックスはノーベル経済学賞が授与された。このような歴史の皮肉について、ヒックス先生は森嶋教授の文章と呼応するかのように、次のごとき文章を残している³⁾。

「(1972年の) ノーベル経済学賞が「一般均衡理論と厚生経済学」の分野における私〔ヒックス〕の業績に対して授与された。かかる業績とは疑いもなく、拙著『価値と資本』（1939年）、およびその直後に執筆した消費者余剰の研究論文のことであろう。それは確かにいまや、かの論議多き「新古典派経済学」の基本文献の一部として認められた仕事ではある。しかしながら、思うに、それはずっと以前の昔の仕事なのだ。私自身がそこから既に

脱皮成長したと感じるような昔の仕事が、ノーベル賞の榮譽を受けることは内心忸怩たるものがあり、複雑な心境を抱かざるを得なかった」

私は過去、ヒックス先生と何回かお目にかかったことがある。その中で最も印象的だったのは、1988年晩夏、イタリアのボローニヤ大学周辺での出来事である。実は、同じ年度の同じ場所にて、「世界計量経済学会世界大会」(*The Econometric Society, The World Congress*)と「ヨーロッパ経済学会年次大会」(*The European Society, The Annual Meeting*)が順次開かれたのだが、それと並行する形で「ジョン・ヒックス教授特別記念会議」(*The Special Memorial Conference in Honor of Professor J. R. Hicks*)も同時開催されることが決まった。私がこれら三つの国際会議の中で、最初の二つの学会で論文報告し、討論に参加することは予め決定していた。

ところが、第三の会議に出席予定の宇沢弘文先生（東大名誉教授）に私がホテルから御挨拶の電話をお掛けしたところ、次のようなご勧誘を頂戴した。

「酒井君、夕方の晩餐会と一緒に来ませんか。うちの家内も参加しますから、君の奥さんも御一緒にしてください。遠慮なくどうぞ!」

これはまさに晴天の霹靂の御招待だった。当時の私は第一に、世界最古の大学でもあるボローニヤ大学のリベラルな雰囲気さに圧倒され、いわば「ボローニヤ中毒症」にいささか感染していた。さらに、自分の専門がリスク研究であるので、「リスクとサプライズ」には多少とも免疫になっていた。その結果、ヒックス先生のための晩餐会に夫婦ともども参加するという特別の幸運にありつけた。

私が晩餐会であったヒックス先生はさすがに体力の衰えを隠しようがなく、車椅子を利用されていた。

2) この文章は、森嶋通夫(1993, 94)に拠る。

私ははるか1983年、ニューヨークでの国際学会における森嶋教授の講演「近代経済学から見たマルクス」(Marx in the light of Modern Economics)に出席し、多くの聴衆とともに非常に感激を覚えたことがある。

次の熱弁は永遠に忘れられないだろう。

「マルクスは偉大な学者なのです！
その理由は、死後百年を経過するも、彼の業績がなお生き続けているからであります!」

3) この文章はHicks(1977)に依拠している。

「宇沢教授のお陰で、ヒックス先生にお会いすることが出来ました。本当に大変光栄に存じます」

「やあ、貴君が日本から来たサカイ君ですか。こちらも遠方のお客様にお目にかかれて、嬉しいかぎりですよ」

ボローニャでのヒックス先生はそれでも精神的には元気で、会議の参加者全員と談笑しておられた。その翌年にはヒックス先生の訃報がイギリスから入るのだから、私は学者としてのヒックス先生の「最後の御姿」を垣間見たのかもしれない。

本稿の狙いは、ヒックス先生がかくまで愛した「経済史の理論」の高峰を前にして、自分なりの「入山式」を行うことである。幸いにも、滋賀大学の同僚の中にはドイツ流の「比較経済体制論」の第一人者である福田敏浩教授がおられる。ドイツ歴史学派の中でも、ヴェルナー・ゾンバルトはかつてマックス・ヴェーバーとともに華やかな旗手の一人であった。だが、現在では、ゾンバルトの名前を世界の学会で聞くことがまづがないというような「落ちぶれ」ようである。つまり、ゾンバルトはかつて歴史と経済理論の総合化を図ったものの、いまや「ほとんど忘れ去られた巨人」である。そして、「古くて新しい城下町」彦根の住人たる私自身は、「温故知新」を金科玉条の言葉にして、「ほとんど忘れられた人間・文物・自然」に対して、ほとんど限りなき愛情を振り注いできているのだ⁴⁾。

本稿の目的は簡単明瞭である。私は本稿において、経済史のヒックスと体制論のゾンバルトとの間に、自分なりに一種の橋架けを行おうと思う。両者の業績を一括すれば、本稿のタイトルにあるとおり、「経済システムの比較理論」(Comparative Theories of Economic Systems)とでも言えるだろ

う。私の知る限り、ドイツのゾンバルトとイギリスのヒックスとの間には、時代的にも地域的にも歴史的にも、また性格的にも精神的にも相当のギャップがある。そのような懸隔は到底埋まりそうにないかもしれない。だが、それにもかかわらず、否そうであればこそ、両者の間に「学問的架橋工事」を試みることはとても重要であると信じている。思わぬ組み合わせから、思わぬ結果が導出されるかもしれないのだ。「瓢箪から駒」という言葉があるが、私は本稿において「瓢箪の夢とロマン」に学者としての生命を燃焼させたいと願っている⁵⁾。

本稿の構成は次のようである。次の第Ⅱ節において、資本主義と社会主義の闘争を簡単に回顧する。前世紀の妖怪たちは今なお経済学者の脳裏の中に徘徊しているので、私なりの「立ち位置」を確認しておきたい。第Ⅲ節では、ドイツ歴史学派の巨匠であり、現在ではほとんど忘れられた存在のヴェルナー・ゾンバルトの比較経済システム論を取り上げる。ゾンバルトによる経済理論と経済史との統合は、後年のJ.R.ヒックスの「経済史の理論」にも通じる現代的意味を持っていると思う。そして実際、ヒックスによる統合化の試みが、第Ⅳ節において吟味される。

思うに、ゾンバルトとヒックスとの関係にスポットを当てるのが本稿の眼目であり、そのことが混沌を極める今世紀の経済学界において一つの新しい研究方向を示唆するであろう。それと関係することであるが、もう一つの研究方向として、本稿の主題と近江商人道との接点が、最後の第Ⅴ節において言及される。本稿は、私自身の新たな研究方向の第一歩に過ぎないが、将来の更なる展開を招来するだろうことを期待している。

4) 福田敏浩教授と私との出会いは、日本学術会議経済部会の会合から偶然始まり、滋賀大学での親密な同僚関係が爾後今日に至るまで続いている。ドイツ語文献に関する福田教授の深遠な学識から、私が直接間接に受けた恩恵は計り知れないものがある。

5) ヒックスの経済史理論については、Hicks(1969, 77)が主要文献である。英国紳士らしい軽快洒脱な筆致が見事である。これに対して、Sombartの名著(1902, 11, 12, 13, 38)は、すべて大部晦渋なドイツ語文献である。金森誠也氏による精力的なゾンバルト翻訳と解説は、私の研究にとって大変有益であったことを記しておきたい。

II 資本主義と社会主義の闘争 —20世紀の二つの「妖怪」か

1: 茅誠司氏と都留重人氏——二つの見解

今から遙か50年前、1960年前後の頃である。当時の世界の政治経済地図は、「青色の地域」と「赤色の地域」とに二分されていた。青色地域とは「資本主義地域」のことであり、西ヨーロッパとアメリカ、オーストラリア、それに日本などが含まれていた。これに対して、赤色地域とは「社会主義地域」のことであり、東ヨーロッパとソ連、中国、それにキューバなどが包含されていた。いわば「青鬼と赤鬼の闘い」は政治経済にとどまらず、科学技術の分野にも及んでいた。

資本主義と社会主義——二つの体制の闘争は、わが日本国内にも持ち込まれていた。いわゆる「保守と革新」、自民党と社会党の間の闘いは、国会外のデモ・集会の過激化を生んでいた。各大学のキャンパスは四六時中、騒然と高揚の中にあり、教師も学生も市民もあたかも「革命前夜」のような空気に飲み込まれていたかのようであった。この間の事情について、著名な科学者・茅誠司氏（当時の日本学術会議会長、東京大学総長）が『朝日新聞』1957年11月6日号の中で、次のように慨嘆されていた⁶⁾。

「人間が、月の世界まで往復できる知識を持っているのに、何故に仲よく暮らすことができないのかと、考えてみると誠にばかばかしい。共産主義、資本主義、そんな対立は一刻も早く解消して、月世界を仲よく見物にゆける時代を造りだす努力こそがこれから一番肝要だ」

6) 茅誠司氏の文章は、都留重人(1959)の出だしのところで紹介されている。当時、「資本主義か社会主義か」ということは、日本の大学やマスコミで最も人気沸騰した話題であった。「はるか遠くにまで来たものだ!」という感慨がする今日この頃である。

これに対して、「大物知識人」でリベラル派の都留重人氏(当時の一橋大学学長、ハーバード大学経済学博士)は、名著『現代資本主義の再検討』(1959年11月)の冒頭の部分で、次のように反論されていた。

「制度としての資本主義と社会主義の区別は、政治家の感情的対立によるものでもなければ、学者の頑な教条主義によるものでもない。「そんな対立は一刻も早く解消せよ」と云われても、抹消できぬ制度上の区別のあることを、茅さんなどにも知っておいていただきたい」

茅誠司氏と都留重人氏——両氏の名前は今では懐かしい限りである。自然科学と社会科学の両巨頭が、「資本主義か社会主義か」の問題について、はっきりした見解の相違を示していた。それから50年という歳月の経過は、こうした論争に「一定の決着」をつけたかのようだ。本稿において興味のある問題は、まず「暫定的決着」の内容とは一体何なのだろうか、また極め付きの「最終的決着」は一体何時につくのであろうか、という点である。これはもちろん、一本や二本の論文程度で完全決着ができない重大問題であろう。私は「リスク挑戦者」として、いわば残りの研究人生を賭けて、かかる一大問題に挑戦するつもりである。本稿は、そのためのほんの出発点にすぎないが、記念すべきスタートだと自分なりに信じている。

2: ソ連科学院発行の『経済学教科書』

——その栄光と衰退

資本主義と社会主義、そして共産主義という言葉が、日本の学者や学生の間で毎日のように使用されるようになったのは、やはり1960年前後のこと

であると思われる。当時、各大学の経済学部では「マルクス経済学」のほうが「近代経済学」よりも遥かに影響力があった。そして、最大人気を誇っていたテキストは、ソ連邦科学院経済学研究所著の『経済学教科書』であった⁷⁾。

何しろソ連は1917年革命以来の社会主義国の盟主であるとともに、宇宙ロケット・スプートニクの打ち上げに史上初めて成功した科学技術の最先進国であった。今でも、「地球は青かった」というガガーリンの名言は、片時も私の脳裏から離れることがない。こういう将来性のある先進国・ソ連において、しかも権威ある科学院経済学研究所が全力を傾注して作成した『経済学教科書』なのである。学生時代の私は一時期、文字通り寝食を忘れて、この経済学教科書の読破に没頭したものだ。同書は何回も改訂版が出ているベストセラーであるが、今でも私の本棚を飾っているのが「改訂第3版」(日本語訳、1959年)である。

若者だった私は当時の学生としては珍しく、近経とマル経の「両刀使い」であり、上記の経済学教科書と同時並行的に、サミュエルソンのテキスト『経済学』(第7版、1967年)を読んでいったものだ。だが、正直なところ、このサミュエルソンのテキストは、ソ連科学院のそれと比較して「情熱不足で、迫力にやや欠ける著作」という印象が拭えなかった。それでも、サミュエルソンの著作を我慢して読み通したことの理由としては、「知で近経、情でマル経、人格の陶冶に両方が必要なのだ!」という我流の「思い込み」ないし「こじつけ」があったのかもしれない。さらに加えるならば、西であれ東であれ、すべての外国文献に大変飢えていた事情もあるだろう。

それはともあれ、私の学生時代の一時期を心情的に大きく影響したテキストが、ソ連科学院の経済学であった。それは大部の書物であり、全4分冊から成る。第1分冊が1ページから258ページまで、第2分冊が259ページから520ページまで、第3分冊が521ページから788ページまで、第4分冊が789ページから1050ページまでの通し番号が付けてあり、分量的にも近経のいかなるテキストをも凌駕していた。

ここで、大著『経済学教科書』の内容をやや詳しく紹介しておく、次のようである。

まえがき

第1章 経済学の対象

第2章 資本主義以前の生産様式

資本主義的生産様式

第一 独占以前の資本主義

第3章から第14章まで

第二 独占資本主義——帝国主義

第15章から第19章まで

社会主義的生産様式

第一 資本主義から社会主義への過渡期

第20章から第23章まで

第二 社会主義的国民経済体制

第24章から第36章まで

むすび

こうして現時点で振り返ってみても、経済学教科書の内容はまさに圧巻である。当時の学生にとって、質量ともに豪華絢爛であるかのように映ったのは、想像に難くないだろう。

まず、「まえがき」の冒頭が、次のような情熱的な文章で始まっている。

7) ソ連科学院の『経済学教科書』は、当時の多くの学生たちにとって「バイブル」のような役割を果たした。それから50年、あの頃のロマンと熱気は一体どこへ霧散してしまったのであろうか。

「経済学教科書の第二版が出版されてのち、ソヴェト連邦や人民民主主義諸国では社会主義生産が一層高まりつつ、弛みなく発展を続け、国民経済の計画的指導が改良され、経済の運営方法が改善され、大衆の創造的発言が展開されてきた。

資本主義陣営では資本主義の全般的危機が一層高まり、植民地体制が崩壊し、内的および外的な諸矛盾が一層激しくなってきた」

このように、テキストの冒頭から、「資本主義か社会主義か」の体制間競争が問題にされている。社会主義生産がますます発展する一方において、「資本主義の全般的危機」が顕著になってきているという。しかし、歴史の進行はこの予言とは逆に、社会主義陣営のほうが早く行き詰まり、遂には1989年、ソ連の崩壊と15の共和国への分裂が起こったのである。だが、このことは「資本主義の全般的勝利」を意味するほど、歴史は決して甘くはないのだ。そもそも、「資本主義か社会主義か」という問題の立て方自体に、大いなる問題があると言わざるを得ない。資本主義であれ、社会主義であれ、その中核の位置を占めるのが「市場経済」である。市場のワーキング抜きに、体制の問題を論じることは出来ない。まず、市場経済があり、その形態や局面が歴史の展開に応じて色々に変化する、とみなす方がむしろ自然だろう。

ところが、上記の経済学教科書の目次から一目瞭然であるように、そこには一定の決定論的歴史観が存在している。それはつまり、「資本主義以前→資本主義→社会主義」というように、生産様式が一方向のみに変化し、それ以外の進行はあり得ないという、硬直的な思考方法である。現実の歴史では、社会主義・ソ連が崩壊したときに、資本主義経済の復活が各地に見られたが、このよう

な復活劇は「歴史の逆行」を示すものなのだろうか。われわれはもっと柔軟な考え方に立って、「歴史は繰り返す」ものであり、循環や復活はむしろ常態であると考えすることは出来ないだろうか。

新世紀に入って、われわれ経済学者は心を広くして、過去の体制選択というジレンマや陥穽から一刻も早く脱却する必要がある。この点において、作家や文学者の人たちの史観は「こだわり」がなく、経済学者より発想が自由である。次に、このような「心の広い発想」のいくらかを検討することにした。

3：色々な分野の多様な意見

——自由で鋭い反応

紙面の都合上、ここでは司馬遼太郎と網野善彦の二氏に限って、その資本主義観の自由さ・ユニークさを紹介しておきたいと思う。

司馬遼太郎氏(1923-96)は、言うまでもなく国民的作家である。その作品は「竜馬がゆく」の坂本龍馬や、「坂の上の雲」の正岡子規・秋山兄弟の行動が示すように、同氏が取り上げる主人公は明るく、夢とロマンがあり、暗い定め運命を吹っ飛ばすくらいの元気さがある。

その司馬氏が、1980年前後の日本経済の土地暴騰とバブルの狂気に直面して、対談集『土地と日本人』(1980年)の中で、珍しく慨嘆されているのだ。

「日本では土地暴騰で儲かったゴリカン社長が英雄的と言われ、またその利益で設備投資をする。そういうものが資本主義と思こんでいるところがありますが、資本主義というものはもっと筋肉的なものだし、相手をなぐるかなぐられるかのものです。水ぶくれで儲かったというものではないはずです。そういう点で資本主義も社会主義もコミュニズ

ムもあろうはずがなく、一種の土地投機主義が横行しているだけです」

上の文章を読むと、資本主義の定義は決して一様でないし、人によって異なることが示唆されている。司馬氏の考える資本主義とは、自動車やビルを作るなどの「筋肉的なもの」であり、ライバルとの間での激しい競争下にある。田畑を更地にして土地暴騰の機会を寝て待つとか、不動産の転売の単なる繰り返しによって暴利を獲得することなどは、「本来の資本主義」とは言えないと憤慨されている。ただ思うに、現実においては、証券会社やヘッジファンドなどは——良い意味でも悪い意味でも——「現代資本主義の権化」ではあることは間違いないが・・・。

要するに、司馬氏の言いたいことは、資本主義の概念や内容を現実に照らして再検討せよ、ということであろう。我々経済学者は、資本主義、社会主義、共産主義に関して、余りにも「古いドグマ」に固執しすぎているようである。もっと自由に、リベラルな立場から「新しい経済観・市場観」を樹立する必要に迫られているようだ。

次に、日本の歴史に次々と新説を打ち立ててきた、名代の歴史学者・網野善彦氏の考え方を紹介しよう。網野氏によると、「百姓は農民ではない!」と断言される。同じような鋭い切口で、同氏は名著『馬・船・常民』(1999)の中で、次のような「新しい資本主義観」を提示している。

「室町時代から「資本主義」などと言いますと叱られると思いますが、服部之総さんが、戦国から安土桃山の時代を「初期資本主義」と言って、だいぶ叩かれたり、論議をよんだことがあります、あの発想をもうちょっと遡らせたなら、鎌倉末期から

「初期資本主義」始まったということもできるかもしれない。そして、これはやはり海が舞台なんですね。海と関わりをもち、貿易をすることによって莫大な富を手に入れることができたわけで、これを「資本主義」と関連させてみると、おもしろいと思いますよ」

網野氏によると、日本の資本主義は——少なくとも「初期資本主義」は——はるか鎌倉末期に始まったと考えてもよい。しかも、海が舞台であり、海上交易が膨大な富をもたらした、と力説されている。日本の戦前の学界では、「講座派對労農派」の論争があり、「明治期の日本社会が封建制か資本制か」というようなことが大問題となっていた。ところが、網野氏の意見に従うと、資本制は鎌倉末期から既に始まっており、室町・江戸・明治時代を通じて面々と続いていたことになる。そうすると、講座派對労農派論争とは一体どういう意味を持っていたのかが、あらためて問われなければならない。また、同じ資本主義といっても、そこに「初期」、「中期」、「後期」などという段階を設けることの必要性も吟味されるべきだろう。

網野氏はさらに、日本の資本主義が海と関わりをもち、貿易をすることによって発展してきた歴史的事実に注目している。恐らく、近江商人、なにわ商人などの華々しい活躍が念頭にあるのだろう。これは従来の「日本資本主義論争」には見られなかった視点であり、これからの資本主義論の展開にとって重要な切り口を提供していると信じるものである。

要するに、作家や歴史家の中には、従来の経済学者にはない自由な発想と新しい切り口がある。我々は隣接分野から、謙虚に、かつ貪欲に学ぶ姿勢を忘れてはならない。

Ⅲ 復活しつつある ヴェルナー・ゾンバルト —比較経済システム論は 死んだか

1: ヴェルナー・ゾンバルトと マックス・ヴェーバー

ヴェルナー・ゾンバルト(1863-1941)とマックス・ヴェーバー(1864-1920)は、ともにドイツ歴史学派の巨人であり、時に同時代の同志であるとともに、時に激しい論争を交わしたライバル同士でもあった。

ゾンバルトとヴェーバーはほぼ同年齢である(1863年と1864年)。日本の歴史で言えば、徳川時代末期、坂本龍馬、高杉晋作、西郷隆盛などの英雄が活躍した1860年代に誕生している。なにしろ、私の祖父母の時代のことであるので、私自身とゾンバルトやヴェーバーとの引っかけはもろん全くない。それでも、私の学生時代の1950年代から1960年代にかけては、「マルクス経済学」が全盛期であり、ドイツ歴史学派のことは大学仲間間でよく語られていた。私の近くには、「マルクス大好き人間」や「ヴェーバー大好き人間」が沢山存在したが、不思議に「ゾンバルト大好き人間」にはほとんどお目に掛かったことがない。しかし、少なくとも戦前には、「マルクスかゾンバルトか」と人気を二分したこともあったし、「ゾンバルトかヴェーバーか」と併称されたこともあったようだ⁸⁾。

例えば、青山秀夫教授(1910-92)は根っからの「ヴェーバー大好き人間」であり、ヴェーバーの研究に全力を傾注されたあまり、視力を大分悪くされた

という。青山教授(1999年)はヴェーバーの「とぐろのように長い文章表現」に相当に悩まされたようだ。

「マックス・ヴェーバーの文章はかなり特徴を持っている。…文章がDerか何か定冠詞から始まってその間にたくさん冠飾句が入り、それを受ける名詞に到達するまでに23行かかった例を私〔青山教授〕はおぼえている」

このように読者の視力の衰えを意に介せず、時に「23行の冠飾句」の文章突破を要求するといふのだから、ヴェーバーの学問の魅力は決して尋常なものではなかっただろう。これに対して、論敵ゾンバルトの往年の魅力については、私自身は寡聞にして多くを知り得ないのは残念至極である。

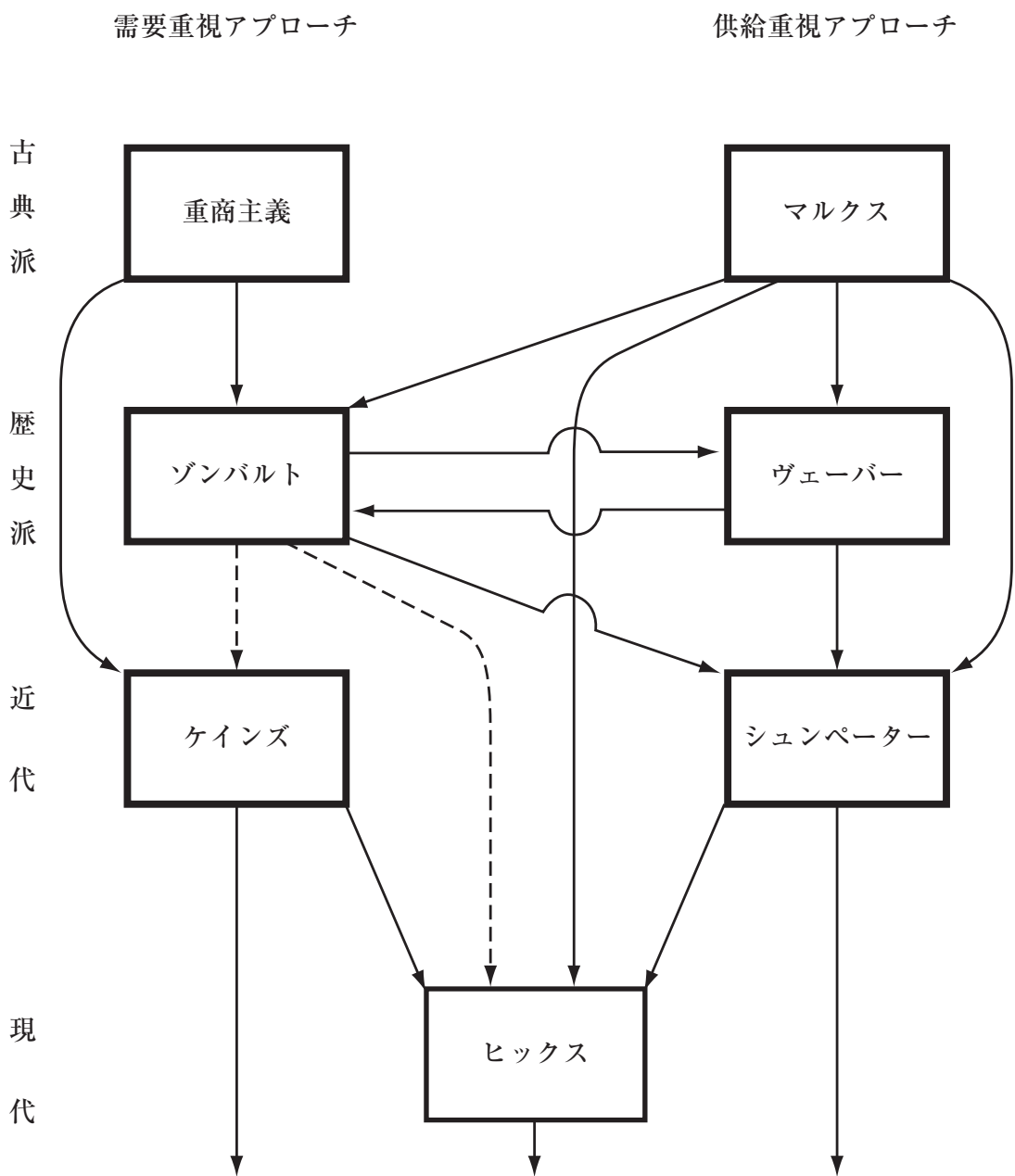
さて、母国のドイツにおいて、ゾンバルトへの関心が最近復活しつつあることに注目したい。事実、1991年6月、ドイツのハイルブロン市において「ゾンバルト国際会議」(*the 1991 Sombart Conference*)が開催され、ドイツ、アメリカ、カナダ、フィンランド、オランダなどから多数の学者が参加した。その時の研究成果がオーガナイザーのバックハウス教授(Jürgen G. Backhaus)によって、英文3巻から成る大論文集として纏められた(1996年)。「ゾンバルトの妖怪は生きていぞ!」と、世界の学者たちは驚愕したにちがいない。

ゾンバルト、ヴェーバー、マルクス、ヒックスなど、関連する学者間の「系統図」を描けば、図1のようなになる。ここでは特に、経済システム比較への二つのアプローチ——需要重視アプローチと供給重視アプローチ——を縦軸に、そして古典派、歴史派、近代、現代の時代区分を横軸に、大胆な系統図を筆者なりに作成している。

8) この点の詳しくは、金森誠也氏の一連のヴェーバー翻訳書の「解説」や、バックハウス(Backhaus)の近編著(1996)『ヴェルナー・ゾンバルト(1863-1941)』(Werner Sombart (1863-1941))を参照されたい。思うに、「ゾンバルト去るも、ヴェーバー残る」というのは、余りにもアンバランスであり、

そこに何か特別の事情があったに相違あるまい。実際のところ、青山秀夫(1951,99)、大塚久雄(1966,77)、大林信治(1993)をはじめとして「ヴェーバー大好き人間」が多数存在する反面、「ゾンバルト大好き人間」が今やほとんど皆無に等しいというのは、理論家の私には極めて不可思議な現象に映る。

図 [1] 経済システム比較への二つのアプローチ——需要重視アプローチと供給重視アプローチ



[出所] 筆者が作成

経済学はもともと市場のワーキングとパフォーマンスに関する研究である。各市場は、買い手(需要サイド)と売り手(供給サイド)の出会いの場である。従って、市場経済システムを比較分析しようとする際には、需要サイドを重視するのか(需要重視アプローチ)、それとも供給サイドを重視するのか(供給重視アプローチ)によって、二つのアプローチがありうると考えられる。

図1において、左側に並ぶ学派や人々は、どちらかという需要サイドのほうを供給サイドよりも重視する傾向がある。詳述する余裕がないが、重商主義派の学者は海外の金や銀など、貴金属の確保を大いに奨励した。後代のケインズ流に解釈すると、金銀の流入は国内の貨幣流動性を高める効果があり、それが国内消費・投資を含めたGDPの増大に貢献した。ここで、国内消費の中には、ダイヤの指輪、絹織物、高級家具など、いわゆる奢侈品などへの需要が含まれており、この連関を強調するのがゾンバルトの著作『恋愛とぜいたくと資本主義』(1922年)である。

20世紀最大の経済学者ケインズは需要サイドを重視する学者である。だから、本来的には、〈重商主義→ゾンバルト→ケインズ〉という学問系列が成り立つはずである。ところが、後に詳しく論じるように、〈ゾンバルト→ケインズ〉という系列は、それほど明瞭ではなく、文献的な確証作業は今後の仕事として残されている。こういう事情を考慮して、図1の中では「実線」でなく、より弱い「点線」で示すことにする。こういう「点線関係」は、〈ゾンバルト→ヒックス〉の間にも成立している。要するに、お互いに敵国同士であったためであろうか、ドイツ歴史学派とイギリス学派の関係は実に微妙なのだ⁹⁾。

9) ゾンバルト自身が珍しく英語で執筆した小冊子『資本主義の将来』(1932年、*The Future of Capitalism*)が、最近になって注目を浴びている。この小冊子は長らく不当に無視されていたが、今ではケインズ主義的経済政策との絡みで

これに対して、図1において、右側に並ぶ人々は、需要よりも供給サイドの役割を強調するグループである。労働価値説を「大成」したと言われるカール・マルクスは、供給の経済学の大学者である。階級対立に基づくマルクスの資本主義観は、ヴェーバーやゾンバルト、さらにはシュンペーターの所説に対して大きなインパクトを及ぼしている。実際のところ、後者3人の著作を読むと、「マルクス、マルクス、またマルクス」のオンパレードである。

本稿で注目する現代の経済学者ジョン・ヒックスは、需要面にも供給面にも偏ることなく、需給両面をバランスよく配慮するような、良識ある「英国紳士」である。ヒックスの晩年近く著作『経済史の理論』(1969年)には、明らかにマルクスの影響が読みとれる。それでも、ヒックスはマルクスに埋没せず、ケインズやシュンペーターなどの影響も受けながら、独自の経済システム論を樹立したことは、やはりさすがと言うべきだろう。私見によると、ヒックスの中にはゾンバルトからの影響も見取れるのであり、これら両人の学問的近似関係を明らかにすることが、本稿の眼目の一つなのである。

2: ゾンバルトの経済史観

ヴェルナー・ゾンバルトは「20世紀ドイツの最大の経済学者かつ社会学者の一人」、マックス・ヴェーバーは「20世紀ドイツの最大の社会学者かつ経済学者の一人」と形容されることがある。兩人ともに20世紀ドイツを代表する社会学者であるが、ゾンバルトはまず経済学者として、ヴェーバーは社会学者としての評価が一番高いようである。二人ともに、経済社会の全体のワーキングのために、「資本主義体制」の概念提起を行い、歴史と経済理論の総合化を意欲的に行った。

重要な文献であるとの認識が広まりつつある。特に、「1930年代ケインズ主義の興隆へのゾンバルトの貢献」を指摘したバックハウス(1996)の見解は、非常に興味深いものがある。とまれ、この方面の更なる研究展開が待望されよう。

ゾンバルトとヴェーバーとの関係は互いに入り混じり、協力と反発を繰り返している。まず、1904年には二人は『社会科学および社会政策雑誌』(*Archiv fuer Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*)を共同編集し、学会の重鎮グスタフ・シュモラーとの間でいわゆる「価値判断論争」を起こしている。この論争間では両者の中は比較的良好であったと推定されるが、その直後に起こった「資本主義の精神論争」において、お互いの関係が極めて険悪化した。ゾンバルトはドイツ流の自己主張型の人物であったが、ヴェーバーはもっと強烈な激情型の人物であったのだ。二人の学問上の密接な関係については、ブロック (Bernhard von Brocke) が次のように端的に述べている¹⁰⁾。

「ヴェーバーの学問的業績を評価しようとする時、その背景にゾンバルトの業績があることを無視することはほとんど出来ない。というのは、ヴェーバー自身がゾンバルトの偉大な業績に負うことが大きい、と率直に告白していたからである」

ところが、このような両者の関係は、今日のヴェーバー研究者たちによってほとんど無視されているという。実際のところ、理論経済学者の私が現在あらためてヴェーバー文献を渉猟したところ、ヴェーバーとゾンバルトとの関係は概して等閑視されるか、せいぜい最小限に抑えられているようだ。思うに、ヴェーバーの死去(56歳、1920年)以後、ゾンバルトが余りにも長生きし、1930年代のヒトラー政権に精神的な肩入れをした、という歴史的事情があったように思う(ゾンバルトは78歳、1941年に死去)。ナチズムによる「ドイツ国家社会主義」は、言うまでもなく過去のマイナス遺産であり、「嫌なことは早く忘れたい」というのが、多くの経済史家の偽らざる感情であったろう。だが、私自身はも

ともと理論育ちであるので、そういう特別の感情を抱いていない。もっと中立的・客観的な見地から、歴史的事実の推移を淡々と冷静に眺められる立場に位置しているのだ¹¹⁾。

よく知られているように、ヴェーバーは、資本主義の精神形成に対して、プロテスタンティズムの倫理が決定的インパクトを与えた、という議論を展開した。これに対して、ゾンバルトはヴェーバーの意見に全く賛成しない。プロテスタントの倫理よりむしろユダヤ人の生活態度のほうが重要であり、生産者の質素儉約精神よりも、むしろ需要者の奢侈道楽や軍事使用のほうが決定的な影響を及ぼしたと力説したのである。この点は興味ある論点であるが、本稿ではこれ以上深入りせず、詳論は別の機会に譲ることにする。そこで以下では、ゾンバルトの資本主義観を筆者に総括するとともに、現代のヒックスの経済史観との架橋事業を積極的に試みたいと思う。

考えてみれば、「資本主義」(Kapitalismus, capitalism)という言葉は、ドイツ歴史学派、とくにゾンバルトによって史上最初に使用されたようだ。その言葉は、スミスの『国富論』(1776年)には全く出てこない。マルクスは『資本論』(*Das Kapital*, 1868年)の中で、「資本家階級」や「資本制的生産様式」について雄弁に論じているものの、肝心の「資本主義」という用語自体を全然用いていないのだ。

ゾンバルトは多数の著作を公にしているが、彼の主著を一つ挙げるとすれば、『近代資本主義』(*Der moderne Kapitalismus*, 1902)であろう。その中で、ゾンバルトは資本主義を次のように規定している。

10) このブロックの文章は、バックハウス(1996)の中に収録されている。

11) ガルブレイス(1987)は、ゾンバルトに対して厳しい評価を下している。「ドイツ歴史学派経済学者・ヴェルナー・ゾンバルトは、研究ひとすじであるが、信用いまいちの学者(diligent but not completely reliable scholar)である。心情的に、そして時に公然と

「資本主義とは一つの流通経済組織である。即ち、二つの異なる人口集団、つまり経済主体としての指導権を持つ生産手段所有者と、経済客体としての賃金労働者が市場を通じて結びつき、協働し、かつ営利主義と経済合理主義によって支配されているような流通経済組織である」。

ゾンバルトによる資本主義の定義は、マルクスの定義よりも柔軟であり、かつ「商業的」である。まず、資本主義を生産経済組織というよりも、「流通経済組織」の一種とみなしている点に注意したい。次に、生産手段の所有者が労働者を一方的に搾取するというよりも、両者が市場取引を通じて協働するという「双務的關係」が前提されている。第3の点は第2点に関係するが、雇用者と被用者の双方が「合理主義的な行動」をとるものと想定されている。要するに、ゾンバルトの考える資本主義とは、市場流通経済に近いものである。その歴史は産業革命以前、はるか中世・近世の商業取引をも含む組織だと広く解釈してよい。

ゾンバルトの経済史観を端的に表わすと、図2のようになる。ゾンバルトは歴史上の経済組織を「非資本主義経済」と「資本主義経済」に大別する。資本主義ならざる経済、つまり非資本主義はさらに、血縁・村落・奴隸制・荘園に依拠する「自給体制」と、家内の手工業に基づく「流通経済」とに分かれる。自給経済は自己完結的であり、他の地域との取引を全く必要としない。農閑期に行う冬季の手仕事労働は不規則的・副業的であり、他地域への流通も極めて限定的にとどまる。このような経済体制においては、ゾンバルトのいう血気盛んな「資本主義的精神」(der kapitalistische Geist, capitalist spirit)の発揮は見られないだろう。

反ユダヤ主義の立場をとった。
後年において、彼はナチスの国家社会主義を理論的に支える役割を買って出た」
この文章は、軽妙な名文家ガルブレイスの言葉と信じられないほどの悪口雑言であろう。
思うに、ガルブレイスは恐らく、

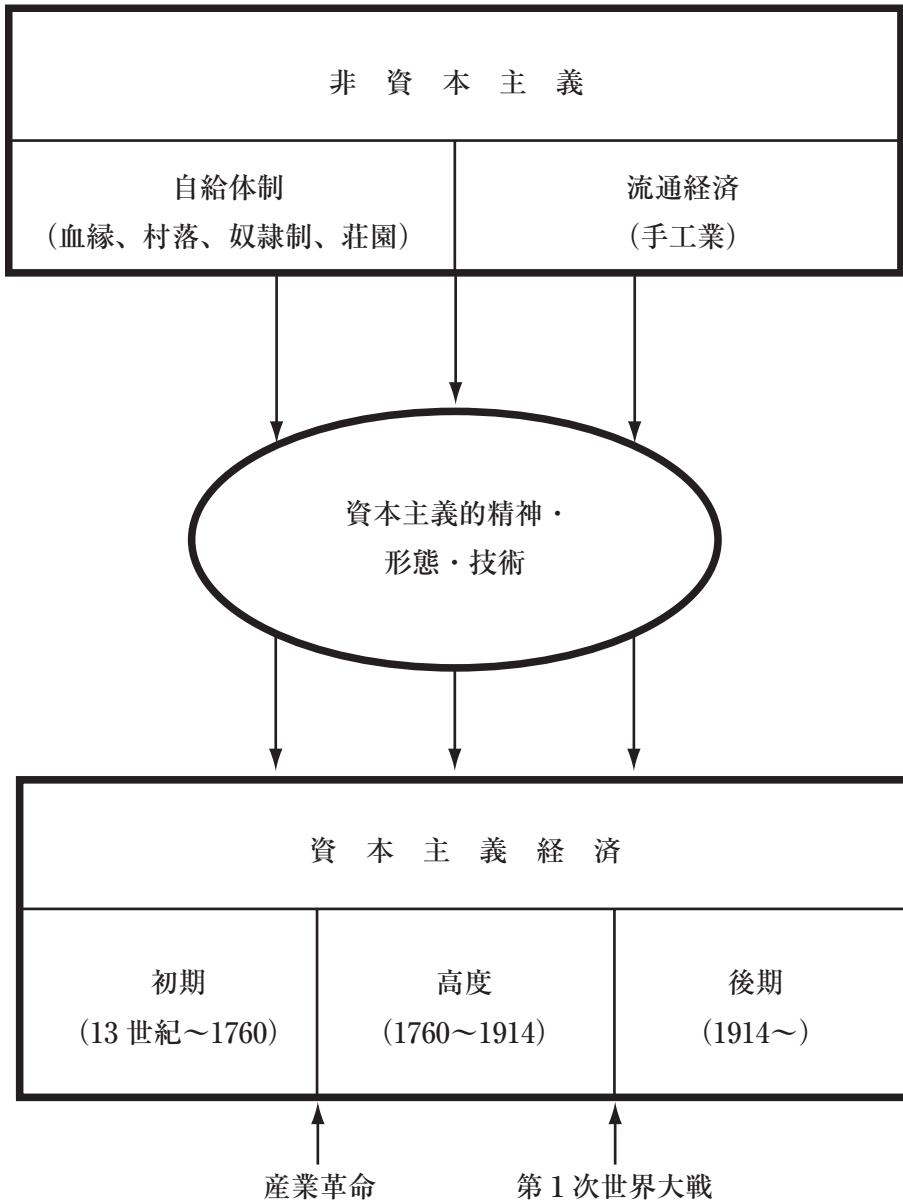
非資本主義経済から資本主義経済へと転換させるものは、何よりも「資本主義的精神」の勃興、さらに密接に関係する「資本主義的形態・技術」の雁行的展開である。精神的には個人主義的行動をとる合理的人間が活躍し、行動・取引の自由を保障する市場形態が規則的に開かれ、科学的知識の応用としての機械技術が普及してくる。マルクスにおいては、「生産力と生産関係の間の矛盾と止揚」というように、資本主義の勃興・発展(そして没落)を生産サイド中心に把握していた。だが、ゾンバルトはマルクス史観から距離をおいて、むしろ取引関係者の先進性、合理性、市場の開放性、科学性などのファクターこそが、資本主義の勃興・展開の「決め手」となると考えていた。ゾンバルトの世界においてはマルクスよりも、人間精神がより自由奔放に活躍する場が与えられていたと言える。

ゾンバルトによれば、資本主義は三つの段階を経て発展してきている。第一の段階は「初期資本主義」(*Frühkapitalismus*, early capitalism)と呼ばれ、古く13世紀から1760年代の産業革命勃発までの長い期間を含む。都市国家において血気と合理性を持つ専門的商人がイタリア、オランダ、ドイツなどの諸国に現れ、いわゆる内地と外地との間の商業貿易に従事した。これらの商人の中には、投機熱に浮かれたり、軍事力を背景にした商業活動を行う者がいたことは確かであるが、ゾンバルトは彼らの積極的・冒険的行為の中にこそ「資本主義的精神」の発揚があったものと評価した。

第二の段階は、いわゆる産業革命(1760年ごろ)から第一次世界大戦勃発(1914年)までに至る「高度資本主義」(*Hochkapitalismus*, high capitalism)である。この時期には資本主義が高度に発展し、近

若きゾンバルトの畢生の大作『近代資本主義』(1902年、*Der Moderene Kapitalismus*)を読破したことがないのではなからうか。
欧米の学界では、「ナチス」や「反ユダヤ」の言葉は、今でも特別な感情を惹起するようである。

図 [2] ゾンバルトの経済史観



[出所] ゾンバルトの著作を参考に、筆者が作成

代的工場生産による国内・国外需要の充足が一層促進された。第三の段階は、1914年以降の「後期資本主義」(*Spätkapitalismus*, late capitalism)である。この時期においては、産業の大規模化・独占化が一層進み、海外市場への軍事力を駆使しての帝国主義的拡張が著しくなる。近代企業による大規模生産は国内市場だけでは消化できず、国外市場の分割競争が激化した。ゾンバルトの見方を私なりに敷衍すれば、第二期の高度資本主義こそが資本主義的の若々しき最盛期であり、それ以後の資本主義は、後期の爛熟期を経て衰退期に入り、やがては再び「非資本主義形態」に戻らざるを得ないものと推測している。

このようにゾンバルトの経済史観は、マルクスの影響がなお残存しているものの、マルクスを必死に超越しようとする姿がそこにある。マルクスやヴェーバーとは異なって、市場経済の生産サイドよりも、むしろ需要サイドを重視する。近世における奢侈品や軍用品への大量需要があつてこそ、国内生産の発展が可能になった、という指摘は今日の意義を持っていると思う。なにしろ、供給と需要とは市場経済の両面であり、その一面だけに偏った経済分析は、著しくバランスを失したものになるだろう。

さらに、20世紀後半から21世紀にかけての金融産業やIT産業の大躍進は、いわゆる「ハード産業」から「ソフト産業」への経済システムの大展開を物語っている。「市場経済とは何か」、「資本主義とは何か」、「社会主義市場経済とは何か」などの諸問題を考察する場合、ゾンバルトによる「柔軟な思考」は決して忘れるべきではない。

人間は時として、長生きして損をすることがある。私見によれば、ゾンバルトはその恰好の一例であ

るように思えるのだ。もし仮にゾンバルトの寿命がヴェーバーと同じ程度であれば、狂気のナチズムの時代に、名声を貶めるような「余計な著作」、つまり『ドイツ社会主義』(1938年)を執筆することもなかったであろう。

私は本稿をもって、ある意味において「ゾンバルトの再評価」を行うための第一歩としたいと考えている。しかも、理論経済学から経済史家へと後年「転向」したと言われる「ヒックス経済学」との絡みにおいて、往年のゾンバルト経済学をもっと冷静に客観的に再評価したい気持ちを抱いているのだ。「温故知新」という言葉は、ゾンバルトに対してよく当てはまるようである。

IV 常に進化するJ.R.ヒックス —経済史の理論は どう評価すべきか

1: 新著『経済史の理論』出版当時の思い出

今から40年前のことである。正確には、1969年のことであるが、ヒックスの新著『経済史の理論』(*A Theory of Economic History*)が世に公刊された。私はその時、アメリカのロチェスター大学に大学院生として留学中であり、数学的な経済理論の習得に必死になっていた。一般均衡理論 (general equilibrium theory)、ミクロ経済学 (microeconomics)、マクロ経済学 (macroeconomics)、計量経済学 (econometrics) などが大学院の中心科目であったが、数量経済史 (econometric theory) という名の新しい分野も開講されていた。

私の指導教授は、一般均衡理論の分野でアロー教授やドブリュー教授とともに、世界の学界をリードしていたマッケンジー教授 (Lionel W.

McKenzie)であった。マッケンジー先生は、かつてイギリス留学中、かのヒックス教授から理論経済学の手ほどきを受けていたこともあり、ヒックスの名著『価値と資本』(1946年)の枠組みを更に発展させて、一般競争均衡解の存在・一意性・安定性・最適性を論じるとともに、多部門成長理論のターンパイク定理の拡張などに全力を傾けておられた。マッケンジー先生の授業は厳粛な儀式のようであり、白いチョーク一本でもって広い黒板一杯に高等数式の応用展開をされる姿は、この世のものとは思われぬほどの神々しさがあった。「数理経済学とは《何と美しい純粋学問》なのだろう!」——これが当時の若きサカイの受けた印象であり、そして、最初の印象は基本的に、終生変わることがないのだ。

当時のロチェスター大学においては、「計量経済史」という珍しい分野の学問が、フォーゲル(Robert Fogel)教授によって精力的に講義されていた。これは計量経済学の手法を用いて伝統的な経済史の諸問題を精緻に分析する最新学問であった。フォーゲル先生の十八番のトピックは「アフリカからの黒人労働はアメリカの経済発展にどれだけ貢献したか」ということであった。私はアメリカ人の友人に薦められて、フォーゲル先生の精力的な講義に数回参加したことがある。「計量経済史は《何と奇妙な混合学問》なのだろう!」——若いときの印象は容易に消えるものでなく、それは後のフォーゲル先生のノーベル経済学賞の受賞後も心の片隅で生き続けていた。

純粋な心を持った若い学徒にとっては、《奇妙な混合学問》よりも《美しい純粋学問》のほうに心が惹かれる傾向がある。私自身は計量経済史の勉強をいち早く断念して、数理経済学の研究に全

力を傾注することにした。ヒックスの名著『経済史の理論』が出版された後でも、「歴史理論よりは、まずは純粋理論を!」という気持ちが大変強かったわけだ。不思議なことに——あるいは当然なことかもしれないが——理論家マッケンジー先生も、歴史家フォーゲル先生も、ヒックスの名著をほとんど話題にされなかったように記憶している。

それから、40年という歳月が流れた。現在の私の目には、ヒックスの経済史理論が時を超えて、燦然と輝いている。その輝きの程度は、マッケンジーの数理経済学や、フォーゲルの計量経済史をも抜いているような気さえするのだ。時は経験を生み、経験は人を成熟させるのだろうか。

ただ本稿においては、今は亡きヒックス先生には恐らく申し訳ないことかもしれないが、経済史の「新しいヒックス」と、ドイツ歴史学派の「古いゾンバルト」との間の接点に分析の光を照射してみたいと思う。戦前のイギリスとナチス・ドイツとは敵国同士の関係にあり、ゾンバルトの業績が英米系の学者によって正当に評価されることは、心情的に至難な仕事なのであろう。幸いにも、日本生まれの私は、ナチズムに対する特別な嫌悪感情を持ち合わせていない。本稿が、経済史の理論に対する新しい視角を少しでも提供することになれば幸いである。

2:ヒックスの経済史観

ヒックスは時に変化し、経年進化している研究者である。自分の一生を一つの学問の研究だけに捧げるような「執心タイプ」の人ではなく、年齢とともに研究分野をいろいろ多様化し、ヴィジョンも絶えず変容させてきたような「進化タイプ」の人である。換言すれば、若年期から中年期、熟年期まで、

その全生涯を通じて自分の業績作品を徐々に建て増していき、ついには壮大な学問の大伽藍を作っていくような求道者である。

こういうスケールの大きい学者ヒックスが、後年において「経済史の理論」に関心を専ら抱き、独自の体系を構築しようとした事実は実に重いものがある。ところが、内外の経済学界においては、「経済理論家としての若きヒックス」の側面が余りにも強調される反面、「経済史家としての熟年ヒックス」の側面がややもすれば軽視される傾向があるのは残念でならない。本稿においては、かかるバランスの欠いた傾向を幾らかでも是正し、「終わりよければ全てよし」という格言がヒックスの業績評価に成り立つようにしたい。

経済史の理論におけるヒックスの考え方、ないし立ち位置は極めてユニークである。第1に、ヒックスは「資本主義の勃興」、「社会主義への移行」という用語を余り好まず、むしろ「市場の勃興」や「交換経済の勃興」という言葉に愛着を覚えている。この点について、ヒックスは次のように述べている¹²⁾。

「我々はどこから出発すべきであろうか。マルクスのいう「資本主義の勃興」(the Rise of Capitalism)に先行するものとして、一つの変容が存在するのだ。その変容は最近の経済学に照らしてみれば、より一層基本的であるとさえ思われる。それは「市場の勃興」(the Rise of the Market)、つまり「交換経済の勃興」(the Rise of the Exchange Economy)なのである」

研究の出発点を「市場と交換の勃興」におくというヒックスの立場は、ゾンバルトのいう「流通経済組織としての資本主義」の考え方に通じている。実際、ゾンバルトの「資本主義」はヒックスの市場

経済に近いものであり、その初期形態は早くも13世紀から18世紀までの地中海貿易や大航海時代の交易商人の活動に体现されているという。

第2に、ヒックスは「重商主義」(mercantilism)とか「産業革命」(industrial revolution)とかいうごときハードな慣用句を避けて、むしろ「商人的経済」(mercantile economy)や「工業主義」(industrialism)というようなソフトな言葉の使用を好む。ヒックスによれば、重商主義は政治的色彩が余りにも強すぎる表現である。また、産業革命については、(フランス革命に見られるような)「革命の主体」が十分明確ではないと論じる。

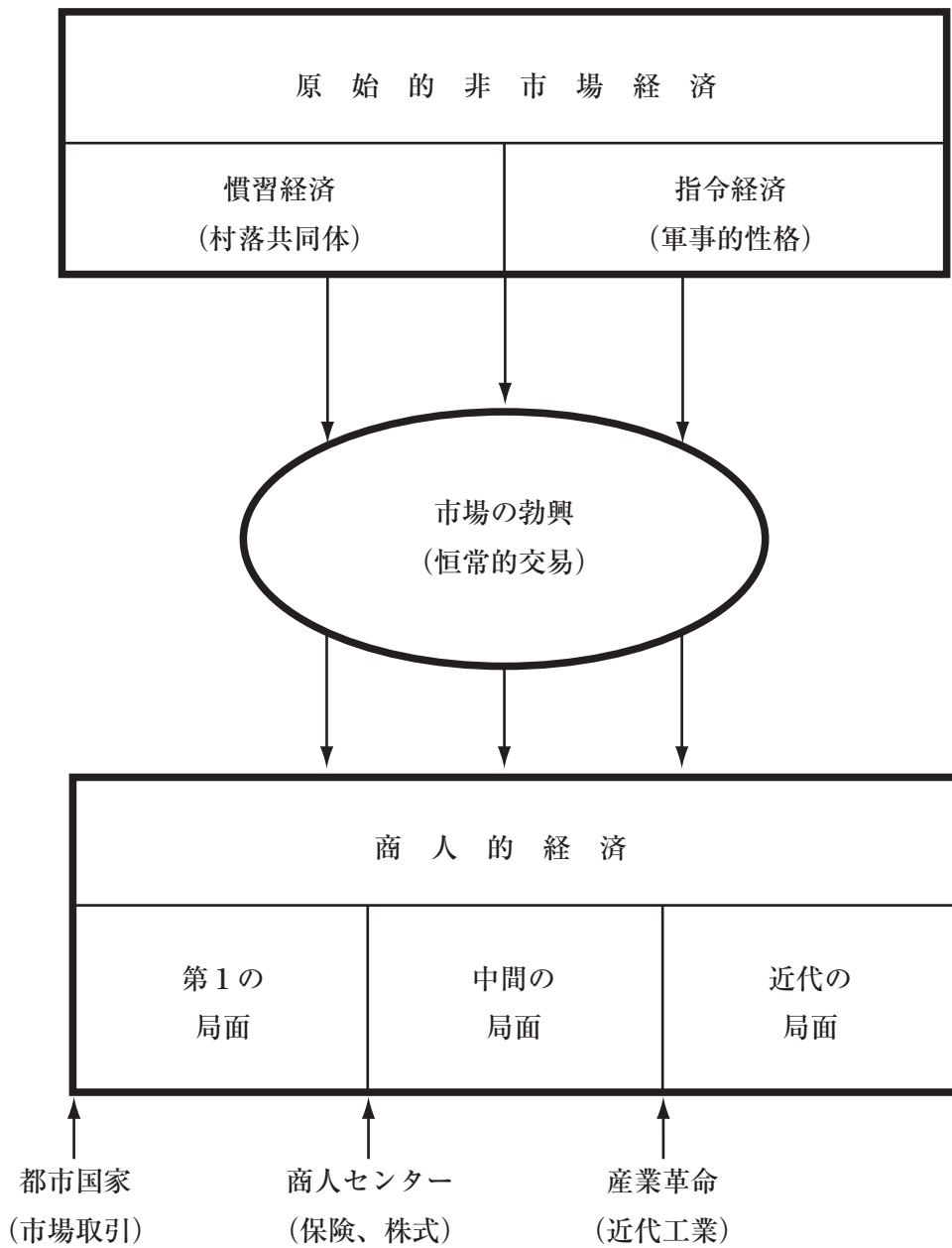
第3に、ヒックスは、唯物史観のような歴史的決定論を好まない。経済社会が「生産力対生産関係の矛盾」によって一方向だけに発展するとは考えず、歴史の大体の「趨勢」と「循環」の可能性を十分考慮しつつ、経済的要素と非経済的要素の相互依存関係の解明に力を入れる。

上記の第2と第3の点は、マルクス・ゾンバルト・ヴェーバーのドイツ歴史学派に見られない「ヒックス経済史学」の柔軟性であり、懐の深さである。ヒックスにおいては、歴史と理論とがドグマティック(教条主義的)でなく、むしろプログラマティック(経験主義的)に融合されている。

ヒックスの経済史観を図表的に鳥瞰すれば、図3のごとくなる。経済の歴史は先ず、「原始的非市場経済」から始まるという。かかる非市場経済は、伝統的な村落共同体によって代表されるような「慣習経済」(Custom Economy)と、かつての蒙古帝国に見られるような軍事的性格の強い「指令経済」(Command Economy)に二分される。ここでは、市場取引が散発的・不規則的にしか行われず、モノやサービスの流通・分配は、伝統的に

12) Hicks(1969), p.7より引用。
ヒックス先生の立場は、
従来のドイツ歴史学派に比して、
はるかに実証主義的・経験主義的である。

図 [3] ヒックスの経済史観



[出所] ヒックスの著作を参考に、筆者が作成

長老間の取り決め・慣習によってか、チンギスカンのような軍事司令官の「鶴の一声」によって決定されてしまう。

こういう保守的な慣習経済を打破するものは、歴史的に「市場の勃興」である。いわゆる「専門家した商人」(specialized merchant)の発生によって、人々の交易が恒常的になり、「市場の浸透」が社会経済の隅々にまで及んでくるのだ。ヒックスによれば、「商人的経済」は三つの局面を通じて発展するという。まず、「第一の局面」(the First Phase)においては、都市国家の中で楽市・楽座が規則化・恒常化し、専門家した商人たちがそこに集まり、交易活動を活発に行う¹³⁾。

それに続く局面が「中間の局面」(the Middle Phase)であり、そこでは商品・金融取引所などの各商業センターが開設され、貨幣流通、民法・商法の整備、銀行・保険会社・株式会社の設立などが重要な役割を担うようになる。最後の「近代の局面」(the Modern Phase)は、大型設備・機械による近代工業の発達によって特徴づけられる。ヒックスは「産業革命」(industrial revolution)なる用語使用を避けてはいないものの、よりソフトな言葉「工業(産業)主義」(industrialism)のほうを愛用している。マルクスの好んだ「資本主義的生産様式」は——ヒックスによれば——もっと大きな範疇である「商人的経済の最後の一局」¹⁴⁾として位置づけられるにすぎない。

さて、ヒックスのかかる経済史観が、前述のゾンバルトのそれとどの点で相似しており、どこで相違するのだろうか。このことは本稿の主要論点の一つである。非常に有り難いことに、そのことがごく視覚的に図3と図2の比較によって可能となるのだ。明らかに、両図の構成はよく似ている。だから、第

一に言えることは、ヒックスの経済史観の基本構造は、ゾンバルトのそれと共通する部分が多いという点である。かのゾンバルトにおいては、非資本主義(自給体制と流通経済)から始まり、資本主義精神・形態・技術の勃興を経て、資本主義経済の初期・高度期・後期が順次的に展開される。このヒックスにあつては、原始的市場経済(慣習経済と指令経済)から開始し、市場勃興・恒常的交易を経由して、商人的経済の第一、中間および近代局面が順次展開される。もし仮にゾンバルトの資本主義をヒックス風に軽く市場経済と読み替えれば、両者の経済史観は——その基本的構造に関する限り——非常によく似ている。

第二の結論は、ヒックスとゾンバルト、両者ともに「商人の役割」を最重要視していることだ。かのゾンバルトにおいては、大いなる冒険心と企画力をもったイタリア・オランダ・ドイツなどの対外交易活動の中に「資本主義的精神」の発揚を見る。商業資本主義を貫く勤勉な経済合理精神は、後の産業資本主義の発展へと受け継がれていく。このヒックスにあつては、個々の人間の「精神発揚」というよりは、こういう商人同士間の取引の場としての「市場勃興」が問題となる。いずれにせよ、マルクスやヴェーバー流の「生産偏重史観」とは異なり、ヒックスとゾンバルトの両者は、需要面をも注視する「流通重視史観」に立脚している。ただヒックスはさすが当代きっての理論家であるので、モノとサービスの売り手と買い手の両サイドを、(ゾンバルトよりはるかに) バランスよく天秤にかけている。

第三に結論づけることは、ヒックスとゾンバルトの両者は、「歴史と理論の総合化」を目指し、しかも経済的ファクターのみならず、非経済的ファク

13) ヒックス(1969)は商人的経済の一活動として、「奴隷貿易」というマイナスの側面にも分析の光を照射している。とくに、ヒックスが(奴隷制告発の)シェリーの詩を文中に引用する姿勢は、極めて感動的かつ良心的である。

「狡猾なさめの群れが黙って待機しつつ。
はるか大西洋の島影に密やかに居りつつ。
あれなる奴隷船の到着をじっと待つ。
かの積荷の中身をひたすら案じつつ」(筆者訳)。

ターの作用を重んじている点だ。マルクスやヴェーバーは現実をやや軽視して、徒に「理想型」だの「経済人」だのという抽象的範疇化を意図したが、ヒックスやゾンバルトはもっと経験主義的であり、「あるがままの人間」の取引活動を現実的に描写しようと試みる。ただし、ゾンバルトの文章表現はややもすれば情緒的・耽美的であり、その限りで現実離れするところがある。ヒックスの経済史学のほうがずっと理論的であるので、将来における理論家との共同研究の道が開かれている。

要するに、ヒックスは現代の理論経済学者であり、「経済史の理論化」を意欲的に構築しようとした。これに対して、ゾンバルトは近代の歴史経済学者であり、「理論的な経済史」の建設に邁進した。両者の意図や方法の細部は微妙に異なるものの、経済史観の大枠に共通するものがあることは、興味の尽きないところである。本稿はほんの端緒の研究にすぎないので、これからの一層の研究展開に微力を尽くしたいと思う。

V 近江商人道との接点 —おわりに

近時、三方よしの「近江商人道」が再び脚光を浴びてきている。グローバル経済危機を迎えて、経済学自体が混迷状態に入っているのだ。これが私のいう「ミチの時代」である。これから解決と復活のための「道(ミチ)」が果たして見つかるか、それとも定めなき虚ろな「未知(ミチ)」のままになお止まるのか、我々は重大な岐路に立っている。

難事において頼りになるのは、歴史からの教訓である。とりわけ、旺盛な開発力と近代的な経営方式を採用しつつ、近世日本の通商事業を発展さ

せてきた近江商人の存在は、現代日本や現代世界の「あるべき姿」を模索する上で、重要な「導きの赤い糸」となるであろう¹⁴⁾。

上述したように、かつてのドイツ歴史学派の人々は、「資本主義」の概念規定に非常に熱心であった。とくに、「資本主義的精神」の関与の仕方をめぐって、自尊心の大きい二人——自信家ゾンバルトと激情家ヴェーバー——との間で非常に激しい論争があった。

ゾンバルトによると、資本主義と前資本主義との相違をもたらす最大のファクターは、企画性・先取性・合理性に基づく資本主義的精神の存在である。そして、そのような精神の発揚は、すでに13世紀の地中海貿易やバルト海貿易等において活躍した商人たちの間で見られるものであるという。たしかに、大航海時代の船乗りたちは、新大陸の金銀山開発やアフリカ奴隷取得のために、(特に初期には)冒険的・軍事的方法を大いに用いたかもしれない。だが、単なる巨艦大砲主義の誇示だけで、対外貿易をかくも長期にわたって維持することは不可能だろう。対外貿易の安定化・恒常化のためには、並々ならぬ企画力と合理主義的政策がどうしても不可欠なはずである。

こういう資本主義精神は、すでに「商業資本主義」の時代から始まっており、それが産業革命以後の「産業資本主義」の時代において連続的に発展していった、というのがゾンバルトの考え方である。更に言えば、ゾンバルトの経済史観が「需要重視アプローチ」に立脚しているのであって、それによれば人々の需要変化は一般的に連続的・恒常的に起こるものであり、かかる連続的変化は商業から工業への産業移行を貫く形で進行するものである。

14) この点について詳しくは、酒井泰弘(2010a)を参照されたい。

これに対して、ヴェーバーはゾンバルトの「連続的思考」に反対して、商業資本主義と産業資本主義との間には「精神上の大いなる断絶」があると主張した。プロテスタントの倫理と資本主義の精神の間に密接不可分な関係が認められる以上、カルヴィンやピュータンの出現以前において、かかる精神の発揚、従って資本主義の展開は基本的にありえないと考えたわけである。こうして、ヴェーバーはゾンバルトとは異なり、商業資本の精神構造と産業資本のそれとの間には、根本的な相違が存在すると考える。更に言えば、ヴェーバーの経済史観が「供給重視アプローチ」の上に立っており、産業革命による近代工業の展開が決定的なインパクトを及ぼしたと論じるわけである。

ゾンバルトの連続的思考のほうが正しいのだろうか、それともヴェーバーの断絶的思考のほうが正しいのだろうか。戦後日本の学界においては、ヴェーバーのほうに軍配を上げる人が圧倒的に多かったようである。もっと正確に言えば、後年になってナチズムに肩入れせざるを得なかったゾンバルトの所説は、ドイツ敗戦とナチの消滅とともに忘却の深淵に沈んでしまったかのようなのである。極言すれば、ゾンバルトの史観は、いわば忌まわしい「敗戦主義精神」としての取り扱いを受けてしまったのであろうか。

ところが、戦後60有余年。もうそろそろ、我々は「敗戦の痛手」から立ち直り、「ゾンバルト対ヴェーバー論争」をもっと冷ややかに、もっと客観的に再検討する時期に来ていると信じる。ましてや、私は経済史家でなく、基本的に理論家である。何か特定の経済史観に対して、精神的に一方的な肩入れをする立場には更々ないし、またそのような気持ちにもなれない。この点に関して、近江商人の第一人

者・故江頭恒治氏は名著『近江商人』(1959年)の中で、次のような問題提起をしておられたことを想起したい¹⁵⁾。

「ゾンバルトとヴェーバーの論争はわが国にも紹介されて、ひところ学界を賑わしたが、なお未解決の問題である。わが国における商業資本を最もよく代表すると見られる近江商人の研究は、当然にこの問題の解明に寄与し得る資格をもつことは疑いない。私が今まで近江商人について調べたところでは、ヴェーバー説にも、ゾンバルトの主張にも、全面的な賛意を表すわけにはいかない」

これは歴史的にみると、江頭教授による重大な問題提起であった。近江商人論の立場から、ゾンバルトとヴェーバーとの間の資本主義論争に対して、一つの新しい見解を表明しておられた。近江商人は、ゾンバルトが注目した商業資本家でありながら、ヴェーバーのいう産業資本主義精神の諸属性(勤労・節約と合理・企画性)を持っている。近江商人は「ゾンバルト的経済人」なのか、それとも「ヴェーバー的経済人」なのであろうか。

江頭教授による意欲的な問題提起にもかかわらず、ゾンバルトとヴェーバーの論争は、未解決のままに放置されて、今日にまで至っているようだ。江頭教授より二世代若い小生としては、誠に残念至極と言うほかない。新世紀を迎えている今日、何とか「解決の道筋」だけでも見つけておきたい気持ちで一杯である。

私見によると、ヒックス教授提唱の「経済史の理論」が、一つの有力な解決法を与えていると思う。ゾンバルトの経済史観は需要重視型であり、ヴェーバーのそれは供給重視型であった。言うまでもなく、市場のワーキングとパフォーマンスは、需要と供給、その片面だけの注視によって十分な

15) 江頭恒治氏以外にも、近江商人に関する膨大な研究が残されている。小倉栄一郎(1980、89)、末永国紀(2000)等は、中でも特筆すべき研究である。興味ある問題は、これらの定評ある近江商人論と、ヒックスの新しい「経済史理論」とを

どのようにドッキングするかである。将来に残された重大な宿題であろうと信じる。

分析結果を出すことは不可能である。ヒックス教授はもともと経済理論の大家であるので、市場のワーキングの静学と動学とをともに重要視する。要するに、ヒックスの新しい経済史観は、需要と供給の両面を考慮した、バランスの良くとれた歴史観に依拠しているのだ。この点、かつてのゾンバルトやヴェーバーの歴史観は、いささか一面的で、バランスに失するものだったと言わざるを得ない。

ヒックス教授によれば、「商人的経済」の勃興と成長こそが、最大の研究テーマである。資本主義か社会主義かの問題は、むしろ副次的な問題だ。というのは、資本主義も社会主義も、商人的経済の一形態に過ぎない。社会主義や共産主義と言えども、市場取引の存在を無視することはできない。

こういう商人的経済の中であって、近江商人はヒックス好みの典型例を提供していると信じる。ただ、残念なことに、ヒックス教授の書物には、近江商人への言及がほとんど無いようである。我々後進の者は、近江商人論の視角から、ヒックスの商人的経済論を補強し、発展させる必要があるだろう。その際、単なる需給仲介者の役割だけでなく、「情報仲介者」ないし「リスク管理者」の役割にも注目するような「新しい総合的・学際的な商人的経済論」を構築することが、是非とも必要である。現代の研究者は、近江商人の家訓「星と天秤棒」に学びつつ、日進月歩、一途に研鑽を進めなければならない。

参考文献

- 青山秀夫(1951) / 『マックス・ウェーバー』 / 岩波新書。
- 青山秀夫著作集刊行会編(1999) / 『マックス・ウェーバーの経済社会学』 / 青山秀夫著作集第5巻 / 創文社
- — (1999) / 『青山秀夫先生の学問と教育』 / 青山秀夫著作集別巻 / 創文社。
- 網野善彦・森浩一(1999) / 『馬・船・常民』 / 講談社学術文庫。
- Backhaus, J. G. (ed.) (1996) *Werner Sombart(1863-1941) / Social Scientist, 3 Volumes; Vol. 1, His Life and Work; Vol 2, His Theoretical Approach Reconsidered; Vol. 3, Then and Now* / Metropolis-Verlag.
- 江頭恒治(1965) / 『近江商人』 / 至文堂。
- Frank, A.G. (1998) / *REORIENT: Global Economy in the Asian Age* / Univ. of California Press. / フランク著、山下範久訳(2000) / 『リオリエント—アジア時代のグローバル・エコノミー』 / 藤原書店。
- 福田敏浩(1986) / 『比較経済体制論原理—形態論的アプローチ』 / 見洋書房。
- — (2001) / 『経済ヒューマニズムの道—レブケの第3の道』 / 『彦根論叢』332号。
- Galbraith, J. K. (1987) / *A History of Economics: the Past as the Present* / Hamish Hamilton.
- Hicks, J.R. (1969) / *A Theory of Economic History* / Oxford Univ. Pres / ヒックス著、新保博訳(1970) / 『経済史の理論』 / 日本経済新聞社。
- — (1977) / *Economic Perspectives: Further Essays on Money and Growth* / Oxford Univ. Press.
- ハイエク・今西錦司(1979) / 『自然・人類・文明』 / 日本放送協会。
- 井上政共編述(1890) / 『近江商人』 / 松桂堂。
- 五木寛之(1998) / 『他力』 / 講談社。
- 岩井克人(1997) / 『資本主義を語る』 / ちくま文芸文庫。
- 森嶋通夫(1984) / 『なぜ日本は「成功」したか—先進技術と日本の心情』 / TBSブリタニカ。
- — (1993) / 『思想としての近代経済学』 / NHK人間大学 / 日本放送出版協会。

- ◎—— (1994) / 『思想としての近代経済学』 / 岩波新書。
- ◎小倉栄一郎(1980) / 『近江商人の系譜』 / 日本経済新聞社。
- ◎—— (1989) / 『近江商人の開発力』 / 中央経済社。
- ◎大林信治(1993) / 『マックス・ウェーバーと
同時代人たち』 / 岩波書店。
- ◎オープンハイマー、F.谷川弘実訳(1931) /
『社会問題及び社会主義』 / 日本評論社。
- ◎大塚久雄(1966) / 『社会科学の方法
—ヴェーバーとマルクス』 / 岩波新書。
- ◎大塚久雄(1977) / 『社会科学における人間』 / 岩波新書。
- ◎酒井泰弘(2010a) / 『グローバル経済危機と社会科学
—近江商人に学ぶ』 / 彦根論叢第382号。
- ◎酒井泰弘(2010b) / 『リスクの経済思想』 / ミネルヴァ書房。
- ◎佐和隆光(1995) / 『資本主義の再定義』 / 岩波書店。
- ◎Schumpeter, J.A. (1954) / *History of
Economic Analysis* / Allen & Unwin. /
シュンペーター著、東畑誠一訳 / 『経済分析の歴史』 /
岩波書店。
- ◎司馬遼太郎(1980) / 『土地と日本人』 / 講談社文庫。
- ◎Sombart, W. (1902) / *Der Moderne Kapitalismus* /
Verlag von Duncker & Humblot. /
ゾンバルト著、木村元一抄訳(1949) /
『近代資本主義』 / 春秋社。
- ◎—— (1911) / *Die Juden und das Wirtschaftsleben.* /
ゾンバルト著、金森誠也・安藤勉訳(1994) /
『ユダヤ人と経済生活』 / 荒地出版社。
- ◎—— (1912) / *Liebe, Luxus und Kapitalismus.* /
ゾンバルト著、金森誠也訳(1969) /
『恋愛とぜいたくと資本主義』 / 原著再版、1922年の訳 /
至誠堂。
- ◎—— (1913) / *Der Bourgeois: Der Geistesgeschichte
des Modernen Wirtschaftsmenschen.* /
ゾンバルト著、金森誠也訳(1990) /
『ブルジョワ—近代経済人の精神史』 / 中央公論社。
- ◎—— (1938) / *Deutscher Sozialismus* /
Berlin-Charottenburg.
- ◎ソ連邦科学院経済学研究所著、経済学教科書刊行会訳
(1959) / 『経済学教科書改訂第3版』全4分冊 /
合同出版社。
- ◎末永國紀(2000) / 『近江商人
—現代を生き抜くビジネスの指針』 / 中公新書。
- ◎外村繁(1956) / 『筏』三笠書房。新装版(2000) /
サンライズ出版。
- ◎都留重人編(1959) / 『現代資本主義の再検討』 /
岩波書店。
- ◎Weber, Max (1904) / "Die protestantische Ethik
und der 'Geist' des Kapitalismus,
Archiv für Sozialwissenschaft /
ヴェーバー著、梶山力・大塚久雄訳(1955) /
『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』
(上下2巻) / 岩波文庫。

Comparative Theories of Economic Systems:

Werner Sombart versus

John R. Hicks

Yasuhiro Sakai

This paper aims to discuss comparative theories of economic systems, with a focus on Werner Sombart (1863–1941) versus John R. Hicks (1904–89), an almost forgotten connection in the economics profession today.

Hicks was awarded a Nobel economics prize in 1972 for his work on “general equilibrium and welfare economics,” no doubt referring to *Value and Capital* (1939). It was with mixed feelings that he found himself honored for that work, since he felt that he had outgrown it and lately shifted his interest to *A Theory of Economic History* (1969).

When we discuss and compare alternative theories of economic systems, we find it quite useful to classify them into two streams. They are: the demand-side and the supply-side streams. The first approach dates back to the ‘mercantilism’ of the 17th and 18th centuries, and includes the important works of Werner Sombart, J.M. Keynes and modern Keynesian economists. The second one contains great economists such as Karl Marx, Max Weber, Joseph Schumpeter and many others. J. R. Hicks, who has integrated those two approaches, may be regarded as a ‘modern promoter’ for the theory of economic history.

Since the 1991 Sombart conference took place in Heilbronn, the work of Werner Sombart has witnessed a certain comeback and assumed renewed importance. He first introduced the term *Kapitalismus* or capitalism into the academic profession, discussing the critical role of *der kapitalistische Geist* or the capitalist spirit in the economic system. He placed the

main break between the precapitalist and the capitalist era at the turn of the 15th to the 16th century. The era of capitalism was divided into three periods: (1) *Frühkapitalismus* or early capitalism (until 1760), (2) *Hochkapitalismus* or high capitalism (1760–1914), and (3) *Spätkapitalismus* or late capitalism (since 1914).

In his book on economic history, J. R. Hicks tried to look at economic activities in relation to human activities of other sorts, which appeared to have some resemblance to Sombart in hindsight. The starting point of investigation was the rise of the market or the exchange economy in which specialized traders with high spirits acted as important middlemen. According to Hicks, *the Mercantile Economy* was split into three phases: (1) *the First Phase*, (2) *the Middle Phase*, and (3) *the Modern Phase*. Note that the first phase is characterized by specialized merchants trading with the outside people; the second by penetration of money, law and credit; and the third by the rise of modern industry. I believe that the merchant of *Obmi* in old Japan indicates a good example of the specialized trader noted by Hicks.

In conclusion, the new Hicks approach to comparative economic systems reminds us of the old Sombart approach that was once influential yet now almost neglected in the economics profession. It is high time for us to carefully explore the similarity and/or difference between those two approaches. We can learn new lessons from old teachings.

